





一日目追加 HO
スマレ







逃げ込んだ先で出会ったのは、女の子だった。
その少女が食事を用意したと言った。
見ず知らずの、それも顔も見せない男に向けて。
親切にして僕を利用しようとしているのか、いや、魔法が
かけられていることは知らないはずだ。
彼女の意図が読めず、ため息をついた。

食事はともかく、体にべっとりと付いた血は拭きたい。
治りかけている腕を使い、扉に寄った。
念の為、扉の向こうに人がいないかを探り、ゆっくりと開
ける。
ボウルにたっぷりの湯が入っていた。
真っ白なタオルと食事が載ったトレイも置かれていて、彼
女が本当のことを言っていたのだと知る。
僕はそれらを引き寄せ、部屋の中へ入れた。

トレイには湯気の立つスープと切られた果物、パンが置か
れている。
屋敷にいたときよりもマシな食事だ。
しかし、顔も知らない相手が作ったものだというだけで警
戒してしまう。
走り続けて空腹ではあったが、僕は魔法のせいで食べなく
ても生きてはいける。
この場においてはおかげというべきか——とにかく、なに
が入ってるとも知れないものに手をつけることはできな
かった。





タオルを湯に浸し、体を拭いていく。

腕が治ってきていてよかった。

まだ再生しない足を拭くときは痛みを伴ったが、体を拭いたことで少しだけ気分がいい。

今になって、服があちこち破れていることに気がついた。

屋敷で与えられた服だ。

脱ぎ捨ててしまいたかったけれど、当然、替えの服は持っていない。

今しばらくは我慢しよう。

体を拭いて、やっと一息つけた気分だった。

フクロウや虫の鳴く声が聴こえて、静かで、穏やかな夜。

「絵が描きたい」

こんな穏やかな夜は孤児院にいたとき以来だった。

漠然と浮かんできた欲求を満たしたかったが、そのための画材はここにはない。

やりたいことがすぐできる環境など、僕にとって贅沢^{ぜいたく}以外の何物でもないのだと思い直す。



孤児院にいたときも、屋敷にいたときもそうだった。

そういえば、マリーはどうしてここにいるのだろうか。

話し方や扉越しで得た情報から、恵まれた環境で育っただろうということはわかる。

そんな少女が、こんな山奥でなにをしている？





ここに住んでいると言っていたが、この部屋は至るところに埃が溜まっていた。

彼女の言うことを信用していいのかわからない。

そう思いながら目を閉じると、深く深く眠りに沈んでいけそうだった。

朝、小さな足音で目が覚めた。

彼女はもう目を覚ましているのだろう、階段を行ったり来たりしている音がする。

ふと、朝の光を受けてきらりと光るスープに目がいった。冷えきったそれに入ってる野菜が、不揃いな切られ方をしていた。

そういえば『料理も少しならできる』と言っていた。

自ら料理をしなくてもいい環境で育ったのだろう。

孤児院は当番制だったから、何度も料理をしたことのある僕とは大違いだ。

そんなことを考えていたら、扉の前で足音が止まった。

